比那名居天子調教日誌

- 本書は東方 project の成年向け二次創作です。
- 本書に描写される行為を模倣した場合、刑事上及び民事上の責任を招来し、または健康を損なう恐れがあります。空想としてお楽しみください。
- 本書には以下の要素が含まれます
  - 誘い受けマゾの天人娘
  - ちんちんによわよわな巫女さん
  - 精力絶倫なおじさん
  - おもらし（大小）
  - 平たい胸
  - お尻おせっせ
  - 直接スケベに関係ない生活描写
  - 都合のよい幻想入り
  - その他強めの幻覚

適量を守って楽しくお読みください。

作者　拝

“Nature has placed mankind under the governance of two sovereign masters, pain and pleasure.”

（自然は人間を二人の統治者の支配のもとに置いた—苦痛と快楽である）

—ジェレミ・ベンサム

“俺を感じさせてくれ　俺に生きる実感をくれ”

“俺に痛みをくれ　もっと　もっとだ”

—フランク・イェーガー

一日目

軽い娘だな、と最初は思った。態度ではなく、体の話だ。僕の家から神社に向かう山道の、少し開けた一隅に、彼女は胎児のように背中を丸めて転がっていた。

「……」

あたりを見回しても人影はない。息はしている。脈もある。出血や打撲の様子もない。しかし肩を叩いてみても返事はない。青みがかって見えるきれいな長い髪も、柔らかそうな服も、土と枯葉がまとわりついているが、暴力の痕跡は見当たらない。動かしても大丈夫だろうか。しばらく悩んだ結果、僕は神社まで彼女を担いでいくことにした。

「捨ててらっしゃい」

「ひでえ」
縁側で茶を飲んでいた霊夢は、その少女の姿を一瞥しただけで短くそう言い放った。
「……知り合いか？」
「まあね」
消防夫スタイルで肩に担いでいた青い髪の少女を、縁側にそっと下ろす。
「どうしたのよ」
「そこの山道に転がってた」
「……おおかた、誰かにケンカを売ってけちょんけちょんにされたんでしょ。また」
ため息を一つつき、静かに湯のみを置く。訝しげな視線が僕をやや下から見上げる。
「なにか、したの」
「信用ないな」
「べつにぃ」

小さく口をとがらせながら、黒目がちの瞳が縁側に寝かされた少女と僕とを交互に見る。
「心外だな」
縁側に置かれた、主のない座布団を二つに折って枕代わりに少女の頭の下に差し込みながら、僕は答える。細く柔らかな、赤ん坊のような髪。産毛のついたままの果物を思わせる、甘やかな香りがふわりと漂う。
「……ただの善意ってやつだよ」
「そう」
霊夢の隣、縁側に直に腰を下ろす。肩の重みが、わずかにこちらにしなだれかかるのを感じる。
「そう、よね。ごめんなさい」
「いや……」
脳がかってに、肩に担いだ名も知らぬ少女の柔らかな感触を反芻する。少しだけ心が痛んだ。

「ごめんな、そんなこと言わせて」
「そういう台詞が似合う柄じゃないでしょ」
冗談交じりに回した腕から、霊夢の肩がするりと抜けだす。
「ああ、そうだ」
立ち上がり、お茶を入れてくる、と踵を返した霊夢の背中を、目線で追う。
「彼女、名前は？」
「……起きたら、自分で礼を言いに行かせるわ。そのくらいの礼儀はわきまえてるでしょ」

静かな夜だった。液晶画面の光とも、内燃機関の騒音とも縁のない、静かで穏やかな夜。家の窓際に一人座って、ランプの明かりに照らされながら、ぼんやりと物思いにふけっては合間に古びた本のページをめくる。外にいたころのことが懐かしくないわけではないが、こんな贅沢な時間に身を浸していられることはなかなかなかった。しかし。

「……どなたですか？」

無遠慮に戸を叩く音が、しじまをかき消す。半ば微睡みながら椅子に沈み込んでいた身をのそのそと起こすと、こちらが迎え入れる前に扉が開き、小柄な人影が飛び込んできた。

「どういうことよ！」

「はぁ」

正面に立つ人影を見る。青い髪の少女。頭一つ低いところから、こちらをにらむように見上げている。昼間僕が助け……いや、拾って、神社に連れて行ったあの娘だ。何がどういうことで、結局この子がだれで、なんで夜更けに怒鳴り込まれなければならないのか、さっぱりわからない。なけなしの自制心を振り絞って、出来るだけ穏やかに、ふたたび僕は問う。

「どなたですか」

「てんし」

天使？　本名なのか自称なのか、偏見だとわかっていても、脳の奥のほうで警告灯が点く。

天使なんて名前の女。
「比那名居天子。私の名前。使いじゃないわ、天の子よ」
「はぁ」
なにかお知らせを持ってきたわけではないらしい。しかし天子とはそれはそれでやんごとない御大層なお名前だ。
「それで、何の御用ですか」
変なところを触られたとかなんとか、昼間の件で何か言いがかりをつけにでもきたのだろうか。めんどくさいことになったな、と気分が沈む。
「なんであんた私に手を出さないのよ！」
「……あー？」
状況が理解を超えはじめ、僕は間の抜けた声を漏らした。

「あんたの噂、聞いたの」

とりあえず座らせたベッドの縁で脚をぶらぶらさせながら、天子は話し始めた。僕は向かいに背もたれを前にして椅子を置き、座って話を聞く。狭い我が家に応接室などという高級品はない。

「……初対面の人間にあんたはどうかと思う」

「あなた、の噂よ」

気を悪くしたふうでもなく、天子は言い直して続けた。根は素直なところがあるのかもしれない。

「外来人の男が、神社に入り浸ってはいかがわしいことしてるって」

背もたれに肘をついたまま、僕は手のひらを額の上で重ねる。面倒ごとの予感が火災警報器のようにガンガンなっている。

「それで、君は……」

同時に、天子の言動の裏にある意図が少しずつ僕の中で形を成し始めた。
「……わざわざ、僕の通り道に」
こくこく、と天子の細い顎が揺れる。
「で、僕が何もせずにそのまま神社に連れて行ったから？」
「そうよ」
肺の中の空気を、ゆっくりと吐きだす。魂が抜けていくようなため息が出た。
「……話は分かった」
わかった、つもりだ。傾けていた椅子の脚が床に触れ、ごとんと固い音を立てた。天子はベッドの上で、小さく身をすくめる。
「それで、俺はどうすればよかった？」
大人げないと理解はしていても、ふつふつと静かな、暗い怒りが首筋あたりの皮膚の下で泡立っていくのがわかる。

「君は、どうされたかった」
セックスのセの字も知っているかどうか怪しいこの小娘が、僕のことを女とみれば見境なく襲って回る、そういう人間だと言っているのだ。同時に、怒りと半分。のこのこと僕の家の中にまで入り込んできた、この娘に興味がわいた。口の端が勝手にゆがむ。
「男が女にすることぐらい知ってるだろう？　知らないのか？」
「……知ってるわよ！」
顔を真っ赤にして天子は叫び、そしてうつむき、うなだれる。視線だけはちらちらとこちらを垣間見ながら、何事かをごにょごにょと口ごもる。
「……入れる……のよね？」
「何を」
「おちん……」
ちん、が尻切れトンボに消えてしまう。だが右往左往する視線が、一瞬椅子の背もたれに隠

れた僕の臍下三寸を注視するのを、僕は見逃さなかった。
「で、どこに」
「どこって……あ、穴、でしょ」
「どこの穴の話だ」
「……穴……」
それだけ言うと、天子は口を結んで自分の眉の上あたりをじっと見上げ、やがて真顔でぽつねんとつぶやいた。
「……お尻？」
抑えきれずに、僕は吹き出してしまった。天子は赫々と哄笑する僕をあっけにとられたように眺め……やがて気分を害したように、目尻に涙をにじませてにらみつける。
「何が可笑しい……のよ……」
「いや、すまない」

最高だ。何も知らない。何も知らないのに、彼女は本質にたどり着いた。膝を打ちたくなるのをこらえて、笑いすぎた涙をぬぐう。「俺みたいな変態ならその通りだ、だがな」ささくれだった気分はとうに消え去り、内心の興奮を押し隠しながら、僕は口角を持ち上げてみせる。

「普通の男と女は、たいてい別の穴を使う」

「別の穴って……」

天子の腹の下、奥ゆかしくそろえられた膝の間で、スカートの生地がふわりと三角州を作っている。僕が指さす自らの股座と、こちらの顔を交互に見かわし、天子は信じられないものを見たように目をむく。

「からかってるんでしょ？」

「いや、まさか」

「……こんなとこ、入るわけないじゃない！」

「試してみるか？」口元から笑いを消し、僕は低くしかしはっきりとささやく。「見せてみろ。

入るかどうか、見てやる」

小さく背中を震わせながら、おずおずと天子はスカートの内側に手を差し込み、わずかに腰を浮かせる。

「立つんだ」

何か冷たいものを当てられたかのように、華奢な肩がぴくりとはねる。下履きを膝で引き下ろした不自由な姿態のまま、天子はベッドの前に立ち、スカートのすそをたくしあげる。外気にさらしだされてひくひくと震える、白く滑らかな下腹のさらに下。盛り上がって押し重なった柔肉が、墨で引いた一本の線のように秘めやかに閉じあわされている。蔽うものといえば、頼りなく揺れるうぶ毛のみ。ため息が出そうな美しい眺めだった。

「よく見えない。広げて見せろ」

「……こ、こう?」

僕は内心の興奮を押し隠し、努めて横柄に言い放つ。細く小さな手の指先が、おずおずと肉

の唇に触れ、膚と粘膜の境界を押し広げる。桜色に充血した粘膜の間で、いじましくもけなげに膨らんだ雛先。尿道の穴はさすがにこの距離では見えないが、さらに下には、未通のしるしに縁どられて狭隘な膣道の輪郭が、揺らめく明かりに照らされて息づくように震えていた。

「……もういい」

ゆらゆらと、顔の前で手を振る。糸が切れたようにつまんでいたスカートを離し、ベッドにへたり込む天子に、僕は顎をわずかに持ち上げたまま声をかける。

「なぜ見せた」

「だって……あなたが見せろ、って……」

「拒絶すればよかった。見せろと言われれば誰彼構わず股座を見せてまわるのか？　どうしようもない娘だな」

曲げた指を突き付けながら、僕は続ける。天子は唇を噛んだまま、目を伏せていた。

「見ず知らずの男に女が大事なところを見せるなんてまともじゃない。自分が何をしているか

よく考えろ」

それだけ言い捨てると、僕は椅子を立った。

天子を部屋に残したまま、僕は軒下に出た。どうしようもなく一服吸いたかった。煙草入れの蓋を開けようとして……手をとめる。

「いたのか」

「いたわよ」

窓から漏れる明かりの下で、赤いリボンが揺れた。

「私が案内してきたんだもの」

「……そうか」

「吸えば？」

「いや、いい」

煙草入れの蓋を閉じ直し、壁に背をもたれて立つ。
「話は？」
「聞いてた」
「そうか」
膝を抱えるようにしてしゃがみこむ霊夢の表情は、暗がりに溶け込んでこちらからはうかがい知れない。
「……彼女」
「ん」
「いったい何なんだ」
「あの子の言った通りよ」口ぶりだけは興味なさげに、霊夢が答える。「あなたに興味を持ったんでしょ。構ってあげれば？」
「俺が、か……」

外来人は人目を惹く。なまじ同じ人間であるだけに。そういうところだとわかっていて、目立たないように過ごしていたつもり、だったが。

「……噂になってるとは、な」

「自意識過剰よ」

「君の迷惑になってなければいいんだが」

「心配ないわ」

彼女がそういうなら、そうなのだろう。その言葉を信じるほかない。

「……で、君の意見は？」

「関係ないわ。あなたが決めて」

どこか遠くの暗闇に目を向けたまま、霊夢が言う。

「ご主人様でしょ」

「……君の意見が聞きたい」

しばしの沈黙。草むらのどこか見えないところで互いを呼ぶ虫の声だけが、涼やかに響く。
「ご主人様は」
やがて、ぽつりと霊夢がつぶやく。
「私が他の人に抱かれたら、どう思いますか」
「想像するだけで気が狂いそうだな」
霊夢が、誰か知らない男の腕のなかで嬌声を上げている。考えただけで、胸が焼かれる思いがする。
「……興奮するよ」
すすり泣きとも忍び笑いともつかない小さな吐息が漏れ、丸めた背中が揺れる。
「……悪い顔」
「傷つくなぁ」
「そう？」

わざとらしくため息をついて見せる僕に調子だけ合わせて、霊夢は答える。
「……霊夢」
名前を呼ぶ声に、ぴくりと小さな肩が震えた。仰ぎ見るように振り返った瞳は熱を帯び、かすかに潤んで震えている。
「一つだけ、お願い」
すがるような視線を向けたまま、霊夢はためらいがちに手を伸ばす。
「あの子にすることは、全部私にもして」
伸ばされたやわらかな手のひらを握り返す。細くしなやかな指が、すがり付くように絡まる。
「お願い」
「それだけか」
「……それだけ」
「わかった」

小さく震える方の隣に屈み込み、僕は答える。
「……じゃあ、あまり酷いことはできないな」
「よく言うわ」
呆れたように首をすくめながら、霊夢は気丈に笑みを浮かべてみせる。重ねたままの手の甲が、柔らかな頬にそっと押し当てられる。
「アレの関係者には心配しないように伝えておく」
「……すまんな。頼む」

「なんだ、まだいたのか」
後ろ手にドアを閉めると、ベッドに座っていた天子はぴくりと身を震わせてこちらを見やり、ふたたび目を伏せる。
「……俺はどうしようもない変態だ。自覚はある。認める」

向かいの椅子に戻り、背もたれを傾ける。

「女の子を縛ったり、叩いたりするのが好きだ。尻の穴を犯すのもな。君みたいな何も知らない娘を連れてきて、おまんこだけは新鉢のままほかのからだ全部に男の精の味を覚え込ませる、なんてのは想像するだけでも興奮する。だが」

一度、息を継ぐ。

「見境なくはしない。相手は選ぶ」

半ば膝を抱くように座ったまま、天子は唇を噛んでいる。だが、膝のあたりまでおろされたままの下ばきを見て僕は理解した。この娘は同類だ。

「俺を見ろ」

弾かれたように、潤んだ視線が僕を見上げる。そこに浮かんでいるのは恐怖でも不安でもない。下着を上げろと命令されるまで股座の心細さに耐えて待つ、期待に濡れた被虐愛好者の目だ。

「……君が抱いている欲望がどんなものかは知らないが、そういうことならしてやれる。そういうのが望みか？」

うう、と小さく何事か言いかけて、天子は口ごもり、再び目を伏せる。

「無理に答えなくていい。今はな」つとめて穏やかに、僕は言葉を継ぐ。「ドアは開いてる。出ていくか？」

言葉を切り、反応を待つ。天子は膝に手を置いたまま、わずかに身をすくめる。しかし、ドアのほうは見ようともしなかった。

「いいだろう」

椅子を蹴るようにして、天子の前に立つ。か細い明かりにかかった影の中で何かを乞うような視線が僕を見上げる。

「立って下着を直せ。俺のベッドを汚すな」

「今夜からここで寝ろ」
「……ここ、で？」
「不満か？」
物置兼作業場に使っている納屋の一隅。木の柵を立てて区切った一角の前で足を止める。押し黙ったまま一歩半離れてついてきた天子は、ＤＩＹ感あふれる座敷牢と僕の顔を交互に見比べ……ぶんぶんと首を横に振った。
「よし。入れ」
天子を促して、中に入る。神社で譲り受けて来た使い古しだが、畳と夜具の用意はある。鼻をひくつかせてみるとなにやら生臭い匂いがするのはご愛敬だ。
「……鍵はかけてない。何度も言うが、出ていきたいならいつでも出ていけばいい。ただ、ここにいる間は俺の言うことには従ってもらう。いいな？」
話を聞いているのかいないのか、天子はきょろきょろと物珍しそうに座敷牢の中を見回して

いる。
「いい、な？」
「えっ？　あ、うん」
僕は聞こえよがしにため息をついてみせる。
「比那名居天子」
己の名を呼ばれて、ぴくっと天子は身を固くする。
「聞いてるか？」
「えっと……あの……」
叱られた犬のように身をすくめながら、天子はうつむく。
「……ごめん、なさい。その、あの」
「期待にそえたか」
震えた手が、スカートの膝のあたりをぎゅっと握る。

「……はい」
「そうか」
「あ、あの……」
おずおずと僕を見上げながら、
「……今から、するの？」
「何をだ」
「あの、さっき言ってた、えっと」
「おまんこ」
「……おまんこ、するの？」
いとけない少女が耳の端まで赤くしながら、覚えたての卑猥な言葉を復唱する様に、僕は昏い満足を覚えながら口角をゆがめる。
「しない。そういうありきたりなことがしたいならほかを当たってくれ」

「そ、そう……」
「チンポ」
安堵したのか期待が外れたのか、薄い胸をなでおろした天子の耳が、ふたたびぴくりとそばだつ。
「見たことは？」
「……」
「大人の男の、大きくなったチンポだ」
「ない、です……」
「じゃあそこからだ。ここに膝を突け」
その場で畳の上に膝を突こうとする天子を促し、立ったまま僕の股座が眼前に来るところまで近づかせる。
「自分で出してみてみるか？」

天子が、こくんと唾をのむ。鼻先に触れそうなところで膨らんでいたズボンの前に、おずおずと手が伸ばされる。もどかしさとこそばゆさをこらえながら、不器用に一つまた一つとボタンを外していく手の感触に、しばらく身を浸す。

「あ……」

四つあるボタンのうち三つまでを外すと、下着の前あきを突き破るようにして、赤く充血した陽根が天子の鼻先に解き放たれる。鼻先に突き付けられた、顔が映りそうに膨れ上がった肉の塊を前にして、天子は目を見開いたまま小さく声を漏らす。

「こ……これ……が?」

「チンポ」

「ちん……ぽ……」

「おをつけろ」

「おちんぽ……」

息をのむ音がここまで伝わってくる。
「……熱い……」
眉を寄せて眼前の熱くたぎった肉塊を凝視したまま、天子は指でおずおずと肉棒の先端に触れ、やけどでもしたかのようにひっこめた。
「……大事に扱ってくれ」
「どうすれば、いいの」
「やり方は色々ある。おまんこの穴に入れるのが主な用途だが……」
秘芯を拡げさせられた時の熱を思い出したのか、天子はきゅっと膝をすり合わせ、小さな顔の顎から眉まで届きそうな陽根の大きさを測るように、指を添える。
「尻の穴に入れたり、口にくわえてしゃぶったりもする。手でしごいたり、胸や腋や尻の谷間に挟んだり、人によってやり方は色々だが、一定の刺激を与え続けると、射精が起きる」
「しゃせー……？」

天子が言葉言葉を復唱しながら、僕のほうを見上げる。傍から見ると保健体育の教科書の解説でもしているような趣だが、これはこれで悪くない。見目麗しい少女を拝跪させ、その眼前に己の一物を突き付けながらという状況であればなおさらだ。

「気持ちよくし続けると、先の割れてるところから精液が出る」

「しゃせい、させれば……いいのね」

「していただく、だ」

腰をわずかに揺らして、天子の柔らかな頬を陽根で張る。叩くというよりかは撫でるくらいの勢いだが、痛みよりも顔を、しかもペニスで張られるという屈辱に、天子の背中がぞわぞわと震える。

「精子は出していただくものだ。ちんぽに奉仕することを覚えろ」

「……は、はい」

「まずは口でしてもらう。射精させるための奉仕の仕方にはコツがあるが、それはおいおい学

んでもらう。今日はまず味を覚えろ。できるか」

亀頭の先端をじっと注視したまま、天子は小さくおとがいを縦に揺らす。

「……これ」

「ん？」

「……おしっこ？」

天子が亀頭の先端で珠を作っていた透明な液に目をとめ、おずおずと尋ねる。

「違う。精液でも小水でもないが……興奮すると出てくる」

「……そうなんだ」

「舌を出せ」

いわれるがまま、天子は舌を出す。赤く鮮やかな、砂糖とスパイスしか舐めたことのないような綺麗な舌が、鈴口ににじんだ雫の味を確かめるように、おずおずと亀頭に触れる。風呂は済ませていたので、多少汗ばんではいても匂いはきつくはない……はずだ。

「ん……」

ちろちろと、天子の舌が亀頭冠を這う。つたない、探り探りの舌遣いだが、熱く濡れた舌が丹念に先から根元まで陽根をねぶっていく。まるで甘い棒飴でもしゃぶるように、その表情に嫌悪の色はない。

「こへで……いひの……?」

横笛のように竿を唇に食んだまま、もごもごと口ごもりながら天子が上目にこちらを見る。肉をくすぐる快楽それ自体にまして、苔一つない無垢な舌を生臭い肉塊に奉仕させるさまに、ぞわぞわとした征服欲が腰のあたりで満たされていく。

「そうだ。まずはそれでいい」

「んっ……」

小さな鼻を可愛らしく膨らませて息をしながら、天子の腰がもぞもぞとこそばゆそうに揺れる。肩から長い髪がこぼれ、ふわりと甘い香りを広げて古畳の上に落ちる。

「自慰はしたことはあるのか？」
「……じい……？」
きょとんとした目が僕を見上げる。
「オナニー、マスターベーション、自涜、手淫」
心当たりの単語を並べて見せるが、天子はふるふると横を首に振る。僕は言い方を変える。
「自分で、自分の体を触って、気持ちよくなったことはあるか」
「……あるわ」
「どうやった」
自分の体について話すのが男の陽物をしゃぶるよりも恥ずかしいのか、天子はうつむいて頬を染める。何かを訴えるようにちらちらと視線が僕を向くが、逃げられないと悟ると唇が重くひらいた。
「……胸」消え入ってしまいそうな声で、天子が告白する。「胸、自分で……触って」

「そうか」

僕は深く満足しながらうなずき、天子の頭に右手を置いた。額を押し上げ、うつむいていた顔を上に向けさせる。

「やってみるか？」

「え……」

口をぱくぱくと震わせ、困惑の色を見せるが、提案と指示の区別はつくようだ。

「今？」

「そうだ」

「……これは？」

横目にてらてらと己の唾液でぬめる陽根を見ながら、天子がこくんと息をのむ。これとは失礼な奴だがまあいい。どのみち、最後まで口だけでさせるのは無理な話だ。

「手伝ってやる。口だけ開けてろ」

「口を開けて、胸を触れば……いいのね？」

「おっぱい、だ」

おずおずと胸元に手を伸ばす天子を見下ろしながら、僕は訂正する。

「うん……おっぱい」

自分に言い聞かせるように繰り返しながら、天子は下から順にブラウスのボタンに手をかける。その下にはブラどころか下着らしいものも身に着けていない。丁寧に襟元のリボンタイを解くと、白くなだらかな丘が露わになる。天子の小さな手のひらにも収まってしまいそうなふくらみは僕の目にも控えめで、確かに胸と呼びたくなる気持ちもわかる。しかし、美しい眺めだった。

「なんだ」静かに上下しながら、肋を浮かせて息づく胸郭に、じっと目を凝らす。「服の上からでもよかったんだが」

「うう……」

耳のあたりまで赤くしながら、天子は低くうなる。それでも小さな手がおずおずと胸に伸び、支えるように包み込む。

「すれば、いいのね？」

目で促す。天子の指が、苺色の先端に触れる。肉の薄い胸の中心で、そこだけは高らかに己の存在を誇示するように腫れ上がっていた。

「あぁっ、んっ……！」

指の腹で押しつぶすように乳首をこね回しながら、天子は背中を丸める。

「んっ……あっ、んくっ」

つねるといったほうが近いくらいだ。こちらが心配になる強さで腫れ上がった乳頭を転がしながら、それでも天子は甘やかに悶えながら背中を震わせる。自涜というにはあまりにも痛ましく自分を責め立てる少女の痴態に、意図せずに股座で陽根がいきり立つ。

「……忘れてないか？」

「あぁ……あはっ、あーっ……」

手のひら全体で薄い肉を掴み、こね回し、指の間で先端をこすり立て、己自身の手で快楽を手繰り寄せながら、天子は言われるがままに口を開く。弛ませたというほうが正しいだろう。だらりと垂れた舌の上に陽根を載せ、桜色の唇に先端を押し当てる。

「んじゅっ、んむっ」

「歯だけは立てるなよ」

奥ゆかしい胸を自分でこすり立てながら、天子は紅い目をとろりと潤ませる。手の動きはいよいよ早くなり、小さな背中は悦楽の予感にぶるぶると震えている。舌と唇だけで、乳を吸うように陽根を吸い立てさせながら、僕は片手で陽物の根元を扱きたてる。

「……んむっ、ちゅ、ぁむっ……？」

目の前で荒々しくしごきたてられる陽根に、天子は一瞬信じられないような目を向けるが、奇異の色はあっという間に悦楽に溶けていく。自分で自分を責め立てながら、雄の陽根に奉仕

させられるという状況それ自体が、少女の幼い体躯を忘我の色に染めていく。

「出すぞ」

「んっ、むーっ……！」

しごきたてた陽根を、唇を割ってねじ込む。小さな頭をまるで自慰具のように揺さぶる背徳感に背中が震え、どくん、どくんと脳天に響く音を立てて精液が柔らかな頬の内側へと絞り出される。

「……んくっ」

天子が絶頂の瞬間、ぎゅっと閉じていた目を開く。吐き出すかと思った瞬間小さく喉が揺れる。

「……何……これ……？」

「精液だ」

だらりと畳に手をつき、胸をはだけたまま天子は荒く息をつく。

「……飲んじゃった。変な味」
けぷ、と乳を飲みすぎた赤子のような小さな息を胃の奥からもらして、天子は僕を見た。
「嬉しそうね？」
「そうかな」
表情を作り切れずに、勝手に眉が動く。僕は笑っていた。射精中枢の疼きは収まっていたが、脳のもっと外側で感じる興奮が収まらない。
「まさかいきなり飲んでもらえるとは思わなかった」
「……そう」
天子は僕のほうを見やったまま、口の端にこぼれた粘つく泡を手の甲で拭う。
「これを飲むと、あなたは嬉しいのね」
「そうだ。俺はな」
僕のほうに目を流したままちろりと赤い舌が伸び、手の甲にこびり付いた粘液を絡めませな

がら、ふたたび口の中に消える。
「体の中から匂いが染みついてとれなくなる。どこにいても、口を開けば俺のものだとわかる。匂いでな」
「飲めなかったら？」
「最初は許してやる。次は……そうだな、一滴でもこぼしたら、その上から顔を押し付けてなめとらせる。全部だ」
綺麗な青い髪を広げながら、這いつくばった天子が床にこぼれた精液にぴたぴたと舌を這わせているさまを想像してみる。悪くない。床は舐められるほどに掃除しておく必要があるが。
同じ光景を想像したのか、天子が肩をぶるぶると震わせた。
「……痛くないの？」
「何が」
「おちん……おちんぽ」

天子の視線の先。赤黒く充血したままのそれは、少しずつ硬さを失い始めている。役目を終えて格納状態に戻りつつそれをちんぽと呼ばせることにはなぜか気が引けた。
「この状態のときはおちんちんでいい」
「その、おちんちん……痛くないの？　あんなにして」
目の前で手でしごいて見せたときのことが気になっていたらしい。確かに、見たことがなければ奇異に映るだろう。だが、お互い様だ。
「見た目ほどじゃない。君のおっぱいと同じだ」
「……」
天子は無言のまま、あからさまに視線を逸らす。
「見ててこっちが心配になるくらいだった。大丈夫か？」
「……大丈夫よ」
目をそらしたまま、まだそこにあるか確かめるように自分の胸を撫でながら、天子は答えた。

「あれくらいしないと、その、なんていうか……ざわざわする感じが、しなくて」
「そうか」
素晴らしい。くっくっ、と僕は愉快にくぐもった笑いを漏らし、さらけ出したままの陽物をしまい込む。
「今日はこれで終わりだ。僕は母屋に戻って寝る」
「……わかった」
「明日からまた、よろしく頼む」
天子は小さくうなずき、もぞもぞと夜具の上に腰を移した。
「明かりは付けておくか」
「大丈夫」
「……ああ、そうだ」
牢の格子戸を抜けたところで、忘れていたことを思い出し、足をとめる。

「名前を預かる」

「へ？」

格子の向こうで服を整えていた天子は、豆鉄砲を食らったような顔をしてこちらを見返す。

「ここで飼うには天子じゃどうも大仰に過ぎる。そうだな」

しばし考えを巡らせる。思いついたのはひねりのないものだったが、まあいいだろう。

「これからここにいる間、君のことはてんこと呼ぶ。いいな」

闇の向こう。膝を抱えるようにしながら、天子が小さく頷くのが見えた。

「おやすみ、てんこ」

（本文サンプル　ここまで）